

講演『習近平は本気で台湾侵攻を考えているのか』を聴いて

2020年11月20日 虎長

2022年11月15日、富坂聡 拓殖大学教授による講演を聴き、それに続く茶話会(Q&Aセッション)に参加した。その際に感じたことを列記したい。

1. 習近平総書記の「独裁体制」について

第20回党大会で、長期独裁政権の道を開いたことに、僕は好感を抱いていない。世の大方の評価と同じだ。しかし、習氏がトップまで上り詰めた、それなりの理由があるとの講師の説明には納得がいった。2017年の著書「中国がいつまでたっても崩壊しない7つの理由」以来、講師が一貫して述べてきたことで、習氏が腐敗・汚職の追及・撲滅に力を傾注してきたことへの国民の支持が高く、これに相当するパフォーマンスをなしえたライバルがない、ということだ。格差是正(共同富裕)もこの路線に沿ったものだろう。

第20回党大会で、党規約に個人的権威を高める文言を入れなかったとはいえ、取り巻きの仲間ばかりで、プーチン大統領や安倍元首相の場合のように、「正しい情報」が入らなくなることで、後継者育成が期待できないことが懸念される。

2. 「台湾有事」を煽るメディアについて

習氏の演説は、「平和的統一」への努力を強調し、「武力行使は放棄しない」とも言っているが、「中国語の全文を読むと、前者は従来以上に強調され、後者は従来言ってきたことの繰り返しである」との講師の指摘は示唆に富んでいた。武力行使ばかりを強調する日本のメディアが伝えないことだ。前者は台湾の人々を念頭に、後者は大陸の中国人のことを念頭におき、バランスをとるというか、「戦略的あいまいさ」を残したのかもしれない。

「台湾有事」を日本政府とマスコミが煽っているとは、共同通信の岡田充氏も昨年来指摘している。政府は改憲・防衛力強化の好機として利用しようとしているし、マスメディアが政府に同調するのは、お上への付度と同時に、刺激的に書いた方が売れるという打算から来るのだろう。

3. 「戦争」の反対は「外交」、「平和」の反対は「混乱」について

この言葉は茶話会で講師に教えていただいた。いわゆる軍事評論家は、武器や戦闘方法の話しかしない、との講師の指摘に僕も同感である。これは、彼らの専門的「差別化」の種であり、そうしないで「外交で解決を優先せよ」と言っても食っていけないからだ、僕は思う。カネの無駄遣いをし兼ねない日本のミサイル防衛に批判的な軍事評論家である田岡俊次氏は、むしろ例外的だろう。日本政府はまずは防衛費を数的に増やして、「やってる感」を示すことを目的としているのではないか。内実をどうするか詰めないで、アメリカから使い物にならない武器を高額で買わされることは目に見えている。

「ミサイルは役に立たない、外交で戦争回避を」と訴え続けている、元防衛官僚の柳沢恭二氏は僕は尊敬している。先の新三木会講師だった保阪正康氏も「新しい戦争論では、武力による抑止論は役立たない」とおっしゃっていた。

4. 半導体について

講師によれば、「中国への半導体供給を止めると、中国は自力で作ってしまうから、供給は止めない方がよい。」とのこと。経済のグローバル化は、格差拡大という負の面を持つが、相互依存が平和に役立つとの面もある。中国がウクライナ侵攻に関連してロシアに武器供与をしないのは、ロシアの政策に必ずしも賛成ではないからだが、武器供与への制裁で半導体が外国から入ってこなくなるのを恐れているからでもある。日本も「経済安保」で、馬鹿正直にアメリカの言うなりになって日本の、特に中小企業の優秀な技術を抑え込まないようにして欲しい。アメリカが主導する制裁は、往々にして同盟国には厳しく、アメリカには甘い、という例が過去の歴史にはあった。

5. 中国人の面子について、個人のレガシーと選挙の票を目的とすることについて

ペロシ米下院議長は、反トランプのリベラル派として僕は敬意を抱いていたのだが、彼女の台湾訪問で、その評価が崩れてしまった。僕はビジネスで台湾、中国大陸両方に何度も出張したが、どちらでも悪印象を持ったことはない。台湾では本省人とのコンタクトが多かったのも、彼らの大陸側に飲み込まれたいくない心情がよく分る。台湾にとり、また周辺国にとり、ベストなのは、台湾独立運動でなく現状維持だろう。講師も指摘したように、中国人の感情を逆なでして打算の余地をなくすことは愚策である。

ペロシ氏は、中国人の面子が分っておらず、個人のレガシーのためと息子のビジネスのために訪台して、不要な刺激を大陸側に与えたことで、台湾での評判は日本のメディア報道のように良くないようだ。一昨日の新聞報道ではペロシ氏は「下院民主党トップ退任」へとあるから、自己の年齢のみならずアメリカの世論も気にしたのかもしれない。

中国人の面子重視を知らない人が、自己の「正論」により不要な騒ぎを起こした例では、過去の石原知事や野田首相の尖閣に関する言動がある。周恩来、田中角栄両首相の「戦略的あいまいさ」に学べなかったのだろう。

講師の蔡英文総統への批判は、習氏への無批判と比較して「ちょっときつすぎるのでは」との印象を僕はもった。けれども、「選挙の票を獲得するために、大陸側への過度に強気な態度を示している」との指摘には「なるほど」と思った。

6. 最後に

講師への「中国寄りだ」との批判がインターネット上で散見される。しかし、僕は、「感情的にならないで、相手の立場を冷静に分析する」ことの大切さを講師は強調されているとの見方だ。「中国にすり寄るとか、アメリカとの縁を切るとかいう話ではなく、中国の視点を理解するのが大事だ」との講演締め括りでの発言が、講師の立場を端的に示していると感じた。

以上